

狒犬を活用して石材業に活力を

— 小豆島と庵治石工の交流会や写真展の開催

山西輝美

— 団体名 — 小豆島狒犬研究会（香川県小豆島町）

— 事業名 — 小豆島と庵治半島 狒犬交流で石彫文化継承、魅力再発見事業

島内にある狒犬を

観光資源に

「オリーブの島」で有名な香川県小豆島^{しんど}は、瀬戸内海の東に位置する周囲一二六キロメートル、人口約二万六〇〇〇人の島です。オリーブ栽培のほか、温暖な気候のもと、醤油醸造、そうめんづくりなどが地場産業です。また、大坂城の石垣石を運んだ「石の島」としても知られます。

小豆島狒犬研究会（以下、本会）は、

小豆島町が開催した「石の文化シンポジウム」や、香川大学の一般公開講座「讃岐ジオサイト探訪」を契機に、島の狒犬の歴史や造形、材質に関心がある会社員や自営業者、主婦ら一五名により平成二六年に創設されました。

主な活動として、二年がかりで島内すべての社社の狒犬の調査・計測・撮影を実施。さらに、撮影した写真を地元温泉施設や公民館などに展示する「狒犬・ネル写真展」を、年一回のペースで開催してきました。写真展は、



現在までに五回を数えますが、地元の方にも好評で、回を重ねるごとに賑わいが増しています。会場でいただいた情報をもとに新たに調査を行ない、その結果をまた写真展でお知らせするというスタンスを心がけています。

このほか、毎年、地元草壁公民館や小豆島町文化協会などが実施する文化展にも力を入れてきました。平成二九年には、それまでの調査の成果を『小豆島のこまいぬ』という写真・探訪本にまとめて刊行しました。

これらの取り組みにより、狛犬めぐりは、地元だけでなく島外の方々にも小豆島の楽しみ方の一つとして認識してもらえようになってきました。ただ、島の石材関係者への経済的なメリットは少なく、狛犬を地元石材業の活力にどう結びつけるかが課題でした。

写真展の開催に向けた 機運づくり

そこで、私たちは香川県本土側の庵治半島にある狛犬、石工に目を向けました。庵治半島は石材の産地として有名で、この地域で採れる緻密で美しい花崗岩の石材は「庵治石」、この地区の石工は「庵治石工」と呼ばれています。かつて小豆島の石工は、庵治石工のもとで石彫修行をしていました。本会では、庵治地域の魅力や庵治石工の石彫技術の高さを、狛犬を通して一般の方々伝えることで、小豆島の石材

業への関心が高まるなど活気づくりにつながるのではないかと考えました。そこで高松市牟礼町にある「高松市の民俗資料館（以下、資料館）」の計らいで、資料館と本会が「小豆島と庵治半島の狛犬パネル写真展（以下、写真展）」を共催することになりました。また、会期中に文化財の研究者で岡山県倉敷埋蔵文化財センター学芸員の藤原好二さんと、狛犬彫を生業としている愛知県岡崎市の石工（以下、岡崎石工）の網川潔さんによる講演会も企画しました。



小豆島町春日神社にて、庵治石工の方から狛犬についての解説を聞く。



庵治半島・牟礼町白羽神社での狛犬探訪会の様子。

これらのイベントを実施するにあたって、以下のような手順を踏むことで、開催の機運を高めていきました。

- ①令和二年四月から複数回にわたって、庵治半島の旧二町（庵治町、牟礼町）で狛犬調査・撮影を行なう。
- ②石材関係者が主催する六、八月の庵治石イベント（高松市）に参加し、本会の活動をPRする。
- ③七月に小豆島で「狛犬探訪交流会（以下、探訪会）」を開催し、小豆島石工と庵治石工の方々の親睦を図る。
- ④一一月に庵治半島で一般向けの探訪会を実施する。
- ⑤翌三年二月に

一カ月にわたって写真展を開催し、会期中に講演会を二日間にわたって行なう。

コロナ禍の外出制限のため六、八月の庵治石イベントは、催しそのものが中止となりましたが、七月の小豆島の探訪会はなんとか催行できました。

見慣れた小豆島の狛犬も、庵治石工の方に「いいものだ、良く彫れている、道具の少ない時代にどうやってここまで彫れたのか」と評されると、本会の会員たちの狛犬を見る目が変わりました。一月は「庵治石の歴史をたどってみよう」と題した探訪会を開催しました。この会には庵治半島の神社の氏子総代さんや讃岐ジオパーク構想推進準備委員会のジオガイドの皆さんも参加してくれました。参加者の多くは、この後の写真展と講演会にも足を運んでくれました。

庵治半島を訪れ地元の方と会話を重ねることで、私たちは、狛犬に対する

関心の高さを知り、イベントの実現に手ごたえを感じていきました。

— 広がる狛犬・石材の輪 —

写真展は、延べ千人を超える方々に足を運んでいただきました。狛犬は、地元の方も気づかなかった地域の歴史を物語っています。幅広い年齢層からさまざまな質問が寄せられ、「地元神社へ行って狛犬をよく見てみよう」という声をいただきました。

二月二七、二八日に行なった講演会には、地元の住民、文化財の専門家、大学教授や高校の先生、ミュージアムの学芸員、狛犬マニアの方々が集まりました。講師の一人である藤原好二さんは、香川県内全域で狛犬調査を行なっており、「狛犬の奉納を年代ごとに並べるとブームが四回（幕末、明治後半、昭和初期、バブル直後）ある」など、とても興味深いお話をされました。もう

一人の講師である綱川潔さんは、狛犬の標準型「岡崎型」の歴史についてお話されたほか、見事なミニ狛犬作品をご持参いただきました。

講演会後の綱川さんと庵治石工の方々による座談会では、本会員や来場者が興味津々で傍聴しました。「庵治の若い衆は、情熱がある」と、惜しみなくお話をしてくださる綱川さんの姿



石の民俗資料館の「狛犬パネル写真展」会場にて。中央：筆者、左隣：綱川潔さん（講師）、右隣：藤原好二さん（同）。ほか、神社の総代、石材店、小豆島狛犬探究会会員の皆さん。

離島人材育成基金助成事業事務局より

本事業は、「知的支援型事業」として採択されました。歴史や文化の探究は、ともすればその専門性の高さから関係者のみに向けた、内に閉じたものになりがちです。小豆島狛犬探究会の山西代表によると、同会では単なる研究ではなく、「地域住民のための活動でなければならない」と、地域に成果が還元されることを意識しながら活動されたそうです。

また、さまざまな団体との連携に尽力されたことも事業成功の大きな要因です。石材加工の協同組合や石の民俗資料館、外部から招へいた専門家と連携しながら調査を進め、その成果として実施された「狛犬パネル写真展」や講演会も大変盛況だったと報告をいただきました。

人材育成基金では郷土資料や歴史、文化を島づくりに活かす事業や、近隣地域も含めた島づくりに関する交流促進事業を広く助成対象としています。小豆島狛犬探究会の活動はこれらの観点において、とても効果的な事例であるといえます。

を目の当たりにして、一年間、庵治半島の狛犬を教材に庵治や小豆島の石工の交流を進めてきた成果を実感しました。庵治の石彫石工の方々も、「一〇年前に先祖が作った物を見せてもらった。石工として誇らしい。自分の作った物も一〇〇年先まで残るんだな」と、感慨深く話されていました。また、写真展を見に来た子どもたちも、たく

さん狛犬の絵を描いてくれるなど、地場産業である「石彫」を身近なものにできたと思います。

今回は、小豆島での展示会準備のノウハウを活かした、初めての島外での活動でした。この取り組みで得たものは多く、展示した庵治の狛犬の写真は、小豆島の文化展などで島の皆さんにもご覧いただく形で地元へ還元していきたい

ます。さらに、講演会の続編や狛犬探訪会を丸亀市でも開催してほしいとの要望をいただき、本事業の水平展開にもつながりました。同市の広島は良質な石材である青木石の産地です。

このほか地元の高校へふるさと納税返礼品として石の小物のデザインを依頼するなど、島での石材業者と地域の皆さんとの連携による新製品づくりも目指しています。この事業を通じて地域の方々に関わることで、皆さんの「郷土愛」を実感しました。今後も小豆島の石材業への寄与を模索していきます。



山西輝美 (やまにしてるみ)

小豆島狛犬探究会代表。昭和36年愛知県生まれ。昭和63年、小豆島へ嫁ぐ。会計事務所勤務を経て、現在は地元の醤油会社に勤務。最近の目標は、四国遍路を歩くこと。